宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話玄海代③1311
定価一年送料共 1000円

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
九州店
本社
福岡市吉塚一丁目三番一号(〒八一三)
電話福岡(〇九二)六一九五六番
京都市下京区油小路八条北入(〒六〇〇)
電話京都(〇七五)三四一一三三四・六六六番

復興事業

第二宮・第三宮地鎮祭並びに沖ツ宮社務所上棟祭斎行さる

既報の通り、第二宮、第三宮社殿建設の用材として御下賜いただいた皇大神宮別宮、伊佐奈岐宮、伊佐奈弥宮の両殿舎は過る十一月七日当社復興期成会関係者、責任役員を始め一般奉迎者の担手のうちに無事到着。これを契機として事業は活気をおび、急速に進捗して去る十一月十三日には早速第二宮、第三宮建立の地鎮祭が斎行された。

当日は寒気に見舞われたが、植栽工事中の敷地中央に清しく補設された斎場に、関係者や崇敬者など多数が威儀を正して参列。折からの寒気が一層身を引きしめる厳粛であった。

祭儀は祝詞奏上、四方清祓い、大鎮地（おおとこしづめ）の儀と滞なく進められ、次に、玉串奉奠では工事の建築担当である弘正組社長を始め各代表者の玉串拝礼がなされ、敬虔な祈りが捧げられた。

一方、沖津宮社務所は離島の関係で、建築業者選定の段階で支障をきたし延引していたが、愈々着工上棟祭までに至った。

同社務所は、九月上旬に工事契約（施工大工、大島佐藤山幸氏）がとり交わされ、早速切込作業にかゝり、十月中旬に上棟の手筈であったが、資材運搬の遅延より海上が時化て遂に十一月二十八日の上棟となった次第である。

現地報告によると二十六日、大島の海豊丸外二隻に資材を満載し渡島。翌々日二十八日早朝、沖中両宮奉賛会役員など七名が大栄丸で渡島奉仕。これに沖ノ島出漁仲間、福崎重人大船頭外十二名が加わり、早朝より終日作業奉仕。

更にこれを聞き及んだ沖ノ島出漁中の各浦の人々からも神潰が続々と奉納され、思ったより早く棟上げが出来、賑やかな上棟祭が斎行出来たとのことであった。

沖ノ島出漁仲間の皆様、各浦の方々に紙面より厚く御礼申し上げたい。

遷宮記念大祭厳粛裡に

―七五三詣に一段と華やぐ境内―

�好天に恵まれた去る十一月十二、通り吟詠大会、茶道大会などが新日午前十一時から宗像大社本殿に於いて、遷宮記念大祭の祭儀が厳粛裡に斎行された。

同大祭は昭和四十六年当社本殿遷座を記念し、爾後を我が国伝統精神の復活の為に邁進せんものと始められたもので、今年で三年目。

これに附随した文化的諸行事は年々充実をみ、本年からは既報の十二日に大祭、十日～十七日に七五三祭の日程で各祭が斎行されたに奉納されるなど、精神文化昂揚とその復活の実を上げている。

同大祭の期間は十一月一日から十五日までという大変長い期間をとっているが、今年は更に二日間を延ばし、参拝者に対する配慮を行った。

この期間中、祭儀としては三日に明治節祭、十一日に大祭宵祭、十二日に大祭、十日～十七日に七五三祭が参拝者で社頭は大いに賑った。

中でも、七・五・三才にあたる子供たちの健かな生育を祈願する七・五・三祭りは八日間の期間で特別に斎行されたが、各地から良い子等の参拝が続き境内を埋め折から境内では、菊花展が開催されており、色とりどりの菊花を背景に思い思いの記念撮影が各所でみられるなど、晴れ着と七・五・三の袋と、両親のにこやかな笑顔で、境内一ぱいに和やかな雰囲気が醸し出された。

また、十四、十五日は当社の招待で玄海町幼稚園、東海幼稚園の良い子等三百名が参拝、当社心尽しの飴を頂いて大喜びであった。

地元宗像郡からも昨年に倍する参拝が続き社頭は盛況であった。

これは、年々ベットタウン化するこの地域の人口増を反映するもので、来年度は益々この傾向が強まるものと予想されている。

〔御案内〕

大晦日の大祓

この一年に知らずくに犯した罪穢れを被い清めるため、崇敬者各位に当大社から赤白の人形が送られました。

この人形が全国から三十一日まで集められ、大晦日夕刻、神門前で大祓式が行われ、人形に託された罪穢は玄海の大海原に流されます。

○人形は三千日には当大社に到着する様御返送下さい。

○出来るだけ多くの方がこの大祓式に御参加（人形で）される様お勧め致します。

〝卯〟の一刀彫

当大社の一刀彫十二支守は、伊勢市の名工匠の逸品で、材質はクス、桐函に納められています。この十二支守を集めると幸運に恵まれるとあって、問合せや予約が殺倒しています。

今年から博多人形師の名作、雲台に月に白い兎を浮彫りにした焼物の十二支（ケース入り）も出されます。

一刀彫十二支守　一体　二、〇〇〇円
焼物十二支（ケース入）　一体　三、〇〇〇円

論説

世事見聞録を読む（続）

―特に「日本神国といふ事」について―

本稿は、幕末動乱期に入る前の封建体制下の時事評論としての性格を、概説したのであるが、その末尾に記述した特である一章「日本神国といふ事」に着眼してみたい。いわゆる復古思想とか倒幕勤皇の理想とかを、堅持し鼓吹する学者でも志士でもない著者が、特に神国論を説き仏道仏教に関する豊富な知識を傾けている点は、奇異な感なしとしない。

「日本は神国といつて上古の民の情に表もなく裏もなく聊（いささか）曇り霞なく明白なる是を神代と云ひ、太古の民と云へり」の書き出しに、この一章所論の根基がおかれている。その善悪の別も貧富の差もない純真な民心は、誠に神国にふさわしい自然のままであったが、大陸から儒道が渡来して物事に理窟が起り、更に仏教が伝来して二心が生じて、清純な神道を押し込め、儒道の義理に仏教の私欲が混合して人心を汚したとする論鋒甚だ鋭く読み進むほどに興味が沸く。なかなかの強硬派の一徹さを見せている。

世に言う神州清潔の民を、自画自讃ながら賞揚するのはよいとしても、例によってわが民族が自然のまま保有する正道の理を乱した元兇の如く、痛撃罵倒して憚らない。釈尊が仏法を説いたのは、その国が人面獣心の邪欲に満ちていたからで、何で本来義理人情の厚い神国に、仏道の流布や菩薩の加護など必要があろうか。殊に君主に仕えて忠誠を励むべき臣下の身が、仏道を信仰して後世の安楽を祈ることは以ての外である。ましてや朝廷や武将の中に、神人国君子国の精神を忘れて仏法に帰依し、入道になったり堂塔を建てたりする者があったことが、大和魂を迷妄に陥れ干戈止む時ない国情に変えた乱暴の沙汰であるとする。

平清盛・上杉謙信・武田信玄の入道法体、源頼朝や足利将軍の仏堂建立、みな大和魂に反して、国費を費し人心を害した例として挙げている。むしろ仏法を排撃した物部守屋に道理があり、儒者を穴に埋めた秦始皇帝を道とする。次いで織田信長の寺院破壊、豊臣秀吉・徳川家康の僧徒征伐を、機宜に適した処置と賛成している。

著者は故事に詳しく論旨も明快であるが、表現が稍過剰の難も指摘される。よく彼の社会観人生観もにじみ出て、凡庸でない政治哲学を抱懐する人物であったことが知られるのである。

陰陽道とその教義から派生した陰道を、人心を惑乱する悪法邪道と戒め、奸悪な陰陽師が政治関係の事件にまで容喙して国家の治安を害した犯跡を責め、切支丹も伝来期の仏教同様に神人国君子国には不要の詐術邪法と憎悪している。故に秀吉・家康ともにこれを駆逐したと説く。秦始皇帝の抗儒は、世に不仁の暴君との譏りが強いが、如何に聖賢の道と云っても指針の大道に有害なら、断行も一理ありと度々肯を持っている。その点、現代中国の革命路線に孔子が批判される思潮と対比すれば、興味深いものがある。

最も文字の使用上変った表現は、国民と町人遊民の区別である。都会に住む者を町人遊民とし、これが物価を吊り上げて、農漁村に働く生産者たる国民や武家を困らせると論述、国民の概念が自然を意味し、非生産の町人は含まれていない。現代の左翼者が国民の文字に代えて人民と呼ぶ傾向と対比される。奈良平安の両朝以前に、遷都が行われた慣行は、都会化すれば遊民が出来る、同時に都以外の辺地は窮民が増す、都会の民のみに政の偏向するのを薄げるための遷都であったと観察する。

この章の終りに、熊沢蕃山はじめ多くの儒者や国学者の著書を、広く読んでその価値を認め、本居宣長の著述しげにまで及んでいる。幕政参画者の政見にも目を通し、寛政の改革には、貧富の隔差、増大を指摘して賛成していない。

このように世事を論評した武陽隠士とは、如何なる身分の人物であったろうか。神君様と家康のみに敬意を持ち、室町戦国の諸将は勿論、徳川三家以外の大名や幕閣重臣がみな敬語がない。幕政に詳しく、経済事情や社会情勢に通じ、批判に遠慮がない。殊に非難攻撃の筆誅は、少しも人を恐れない。これら諸点を綜合して想像すれば、彼は隠居する前、幕府の主要な役職に就いていた人物で、身分は大名格であったであろう。姓名は詮索する必要はなかろう。

阿蒙少言

歳末の風景も、少言子の少年の頃と現代とでは、大きな変り方を感ずる。正体不明のましない屋が、悪鬼退散家内円満のお札を戸毎に売り廻る。列べる本山本宮の肩書などあてにはならないが、断るのも老人達にはできない。今日群立するアパートに、ましない札が現れても酒売にはなるまい ○ 表札と笑門来福、名前も幸福を念じて親が良い字を選んだのだろうが、笑う門には福来たるの文字通りにゆかないこと同様 ○ 今の世相は、天下泰平万民和楽の効能書とは縁遠い。微笑外交や微笑親談に虚飾が感じられる。笑い方とその意味も時代は、幾つかの種類がある。嬉しさやおかしさが無意識に誘い出す笑い方が人間の笑で、社交上の必要から作る笑顔など大底不純で天真を欠くこと勿論 ○ 長年舞台で修練を積んだベテラン女優の述懐、笑う演技は泣くことよりも難しい、笑う表情になる理由をしっかり噛みしめて自然に湧く笑いでなければ落涙である。名優は煙管（きせる）のたたき方にも何年かの研究をやるという、まして笑いは演技の眼目、その苦心もなみなみではなかろう ○ 軽妙な機智と洒落（しゃれ）の応酬で滑稽を演ずる漫才、寄席で人気が集る。悪しい話になるが、広田弘毅元首相が巣鴨で処刑される時、一足先きに刑場へ去った三名の将軍連が、萬歳を三唱したのを演芸の漫才と結びつけて冗談を言ったと伝えられる。死に臨んで咬々戯言を吐く大悟と感嘆する人、そうでないと否定し謹厳を敬慕する人、論議いろいろだが大人物に最期の微笑があっても不当でない ○ さて歳末新春の社寺はにぎわしい。観光ブームに商売気を起して、参拝券を買わねば文化財の本尊が拝めない所もある。空念仏や狭窄国では、鬼が笑うだろう。（白雲）

第XI回 宗像大社歌会詠草

毎月五日〆切　詠草到着順

清水市　鷲津かつ代
次郎長の菩提寺ちかく住みながら訪ふこともなしまた病みつつ

田島　吉武　武雄
焼き餅の臭いほのかに漂いてふわりとふくらみふわりとまた消ゆ

曲　天野トモエ
晩秋の月欠けゆくさま四度出て皆既月食の闇空を見る

東郷　藤崎　辰子
芸をするいるかの様を見てなりて涙のごときものゝみ上ぐる

徳重　石松やす子
両膝の痛みは未だ癒えざれど迎ふる年の幸を祈りつ

香稚　桜井　ツ子
漸くに老いて恋はしきゝふることの土にほ、ぶ見身近に持つ

田久　立花　勇雄
寒風に黙しつつ鋤く水田に飼鶴群れて落穂拾えり

田熊　力丸　一郎
街街は今商戦の酣で客足呼びつゝ歳は暮ゆく

田久　小方　実
木を倒すチェンソーのひゞき絶え間なく師走の山のたそがれ早し

名残　竹原　圓
境内を出てバス停に立ちおれば菊展を見し友も来合す

深田　中野　節子
柿ちぎりにつきゆきし児の唇瓜の赤きレイつけて帰り来たりぬ

鐘崎　村田　四郎
逆養蚕涛九死に一生得て帰る天を妻はひしと抱きしむ

田熊　吉田　直志
辺津宮の老樹仰げば野鳥と戯からす声和を告げること

田熊　今村　重刀
平尾台穂薄の波つゞく中羊にまがふ白き石群

津丸　松尾　豊
七十の今持ち来し妻ながら白髪いゝ筋見えてさびしき

津屋崎　占部　由久
晩秋の末青に映え合ふ空と海ゆく船の絵の如く見ゆ

武丸　原田　リノ
西を向く隣の納屋の窓硝子真赤に焼くる夕空を写す

津屋崎　麦野　時雄
冬の日の暖か味覚ゆる縁に出で読書しながら居眠りていたり

武丸　原田まつ代
雑草を抜きたる畑に木陰なる菲植えかえん土を耕す

白木うめの
御座舟の着きます花火に船団の中央あたり浜より拝む

大井　吉田ますみ
若き娘等のはずむ話を伺気なく聞きつゝ一人秋の旅行く

津屋崎　内田　久美
小さきまゝ早や実をつけし道草や風さわぐ山は秋中旬なる

福岡市　梶木　州児
空澄みて紅葉映えたり大宰府橋神のみ前の幣（ぬさ）ならめやわ

宮田　北原　君子
何買ふと言ふことなきに孫達の小物買いをり雑踏の中

宮田　片山　一
萩の街松陰にかかること多し維新の風は今も吹きおり

城南ケ丘　早川須磨
山水を引きし竃に手水槽溢れる水の甘く冷たし

宗像　中村　幸
道路工事の深夜作業に交りゐる女ヘルメットのしたたにくましい

宮田　北原　君子
幾度か出でて仰ぐに仲秋の名月は見えず雲厚くして

福岡市　吉田　信夫
二拍して音のさやけしこのひと日何か嬉しきことのあるやも

大和町　宮本　奈香
味噌汁のわかめの香りたたいぬ休日の朝の厨はわびし

田熊　有田ゆり子
冬陽さす縁にころがる糸まりに蝿の止まりて小さく鳥づく

日の里　安部さつき
薄れゆく太陽を背にそゝり立つビル連りて暮れゆく早し

大井　安部　静子
久々の雨に潤ふ畑打ちて老二人に足る秋野菜まく

田熊　岡部　緑陽
筆擱きてこたつの上を鈍く這う蝿を吾が身の末と愛しむ

丸　立石ろせ乃
福岡市　信夫

大麻頒布式と氏子評議員会行わる

―奉幣使に津屋崎の小沢和夫氏決定―

去る十二月六日午前十時から当大社清明殿に於いて、宗像郡の昭和五十年度の伊勢神宮大麻（御神札）及び当大社大麻の頒布式が執り行われた。

これは一般には伊勢神宮大麻を一般家庭にお頒ちする前に神社庁の各支部（一市一郡等を単位）ごとに、お清めと頒布のご奉告が神前になされるものである。宗像郡（宗像支部）の場合は宗像大社が全郡を氏子とする為、古くから当大社に郡内各神社関係者や氏子総代等役員が全て参集し、当神事を行ってきたもので、併せて当大社大麻の頒布式も兼ねられてきたわけである。

この日は寒気に見舞われたが、各関係者等八十余名が参集し、同神事が大社神前で厳かに斎行され、この後、引続き神社庁代表として出席された西高辻副庁長（太宰府天満宮々司）の挨拶や、当大社宮司、中村清之郡総代会長などが選出され決定した。

宗像大社菊花会反省会
佐世保菊花会の参加を承認

宗像大社菊花会は、発足当時からの目標であった「国士に花を」を主眼として今日まで行ってきて今年で四年。年々着実なる歩を進め、その多岐に亘る活動が衆人の注目するところとなり、一方多くの方々の深いご理解とご支援を得てきた。これをふまえて、第四回西日本菊花大会が終了して間もないさる十二月一日、当大社に於いて反省会を兼ねた役員会が開かれた。

当日は菊花展の反省を主軸にして来年度の基本方針に至る問題など種々討議された。

決定した主な出品規格要項に関する面は次の通りである。

一、大輪の高さは最前花が鉢底から花頭までを一米とし、最後花を同一米五〇とする。

一、懸崖の規準出品作品は括付懸崖（一、五米以上、赤、白、黄三鉢組の作品）、自然作懸崖（一、五米以下、赤、白、黄三鉢組の作品）の二段とする。

一、盆栽は岩付、直観、文鎮、列並等形の変ったもの三種類三鉢組を規準出品とする。

一、競技花を次年度より復活する

花名　大芳拂月（赤）

〇鉢出品は九寸鉢に限定

一、管物、一文字、佐賀菊等の四鉢花壇を新設する等々。

又本年度長崎県佐世保菊花会より嶺岡作り一点が特別出品されていたが、来年度より本格的に宗像大社菊花会へ入会し、多数の出品をしたいという要望があったことについて、この反省会出席理事全員一致で入会を歓迎承認するとともに更に他地域にも働きかけていく事などが決定した。

〔お知らせ〕

NHK「ふるさとの自然」で沖ノ島の自然を放映

一月二日午前七時二十分

去る十一月に放映されて好評を博した「ふるさとの自然・沖ノ島」が再映されることになりました新たなる年の始めに民族の心のふるさと沖ノ島を拝し、昭和五十年を清々しく送られる様、お勧めします。

〔社務日誌から〕

十一月

七日　東京大学谷川名誉教授、九大相川教授外参拝。歴史研究のため。

八日　出光興産㈱全国製油所代表者参拝。安全祈願祭の後、第二宮・第三宮建設地前面に植樹

八日　下関ようじ小学校ＰＴＡ四十名参拝。当社を歴史散歩。

十日　下関唐戸町婦人会八十名、新日鉄観楽会七十名が各々参拝。境内の菊を賞で清々しい心で本殿に額き家族の安全を祈る

十一日　新出光石油㈱本社女屋の暖房ボイラー火入れ式が大社司祭で斎行された。

十一日　遺族誌会議が当社祈願殿会議室で行われた。

十一日　大島敬神婦人部が参拝。

十二日　出光本社、店主室から二十八名参拝。幹部社員研修会最終日程。国家平安、社業安全と各々の業務安全が祈られた。

十三日　県老人大学百名参拝。主に各地区のリーダー等であり、清明殿で会議。

十三日　宗像警察署、必勝祈願の為参拝。柔、剣道部員が互いの健闘を誓いあう。

十五日　富山光運会参拝。同会関係各社の業務安全と社業繁栄が祈られた。この後、第二宮・第三宮建設地前庭に同会奉納の榊の木を植樹。

十七日　折尾女子大生十名参拝。

十九日　沖津宮参道調査団沖ノ島に渡島。沖ノ島の学術調査跡の状況視察を兼ね、島の崩壊状態と参道建設視察、下調べを行い

二十日全員帰社す。

二十日　自衛艦あきぐも副艦長外参拝。艦内に宗像神社を祀る同艦の竣工奉告と報賽のため。

斑唐津壺が奉納さる

唐津市衣干山の里で「小次郎窯」を営なむ、窯元の西岡小十氏が、先日当宗像大社を訪れ、斑唐津の壺を奉納された。

壺は呈分を多く含む胎土を高熱で焼きしめ、釉薬は長石釉、暗青釉と抽象的な鉄文技法を使っている。淡赤白色主体とした釉のなかがはみる人を美の世界にひきつける。

同氏は、古く神功皇后により開窯された同地の各窯を多年調査研究され、唐津焼初期の朝鮮唐津、また古唐津特有の絵唐津の伝統技法による美を追求しながら、現代生活にも調和する様相を苦心のうえつくりあげている。

漫筆明暗箱 (22)

母よ、あなたは強かった

ある出舎では「嫁を貰うなら、親を見て貰え」との縁談学がある。その親は母親を指している。長い人生経験から生れ、先人の言い伝えを累積した縁談学には、傾聴に値する多くの貴重な教示を含んでいる。母親がナマクラでだらしがなく、家庭の躾に放漫無関心では、立派な子女が育てあげられる道理はない。

口先だけで強いことを言い理屈は一人前以上でも、子女に対する無言の配慮を欠いた家庭に、良い苗の育たないこと、人間造りが家柄や財産によらない常識が、平凡ながらこれを証明している。そんな母親は「母よ、あなたは弱かった」に類し、身体の強弱などはその対象にはならない。

権門勢家、加うるに大きな財産、まことに良好な苗床である筈だが、そこに優秀な人材が育ったれは稀である。歴史上に名ある人物を取りあげて考えても、むしろその反対の境遇から出た場合が多い。顔も名も出さない母親が、黙って背後に在った気がする。

縁談学から母の強弱二つの場合を拾ってみる。母親としてわが子に対する愛情に変りはなくとも、ものの考え方による生活態度の違いは、子女の出来上合を大きく隔てる。日常人の周辺にその見本は少くはない。

適齢期の娘を三人持つ母親、うちの娘の結婚相手は地元にはないと、気位の高い強気の婚探しを吹聴して、田舎役場の職員や二流会社の支店勤務などの話を持ち込むと、その人物の如何まで聞く耳は持たない態度で断る。時には失礼なと立腹して受付けない。

では、相手の家柄財産身分などは申し分ないのが現れるかと思えば、一向に地元はおろか遠方からも出てこない。高くとまることは勝手だが、老嬢の域に達しては、身分違いの地元民でも振り向く舎がない。田舎役場が二流会社は値は下がるばかり。日本中に相手はいないのだろう。広く欧米人でも探してはどうですかとの勧言は、ひどい皮肉になる。

実は頭脳の弱い母である。家柄や親の身分に、自信ある青年は関心を抱かない。女房の肩書や学歴は飾の種にはならないと。

紛飾をはずして、娘だけの嘉価を見たらお話にならないからである。放漫な育て方による羊棒強さ、生来あまり上等でない脳味噌、美人でなく愛嬌もないので、身分違いの地元民でも振り向く舎がない。田舎役場か二流会社から、人物がよければ等の相手だと教えてやりたいところである。

結婚相手の見つかるぬ探し方は、鯖の田んぼで鯛を釣るにひとしい笑草になりかねない。こんな親にリードされる子は不幸である。「母よ、あたまが弱かった」。

次は実家に病身の母を持つ若妻の話である。彼女の育った家庭は貧しいが、若い頃学校の先生であった母親が弱いため、中学生の頃から家事を助け、折々は病床につく看護にあたり、働きながら学ぶ成績は高校卒まで、極めて優秀であった。この頃、はやりの短大に行かず、家事を母に代って本格的に担当し、傍ら花嫁修業を怠らなかったと聞く。

教育者であった母の娘教育は、厳しくはないが愛情の真実を生かした周到さがあったようである。彼女は現代的良妻賢母になるのであろう。その家庭に生れた子女は幸福に成長するのであろう。「母よ、あたまは強かった。」

近代の縁談学は、この両者を対照的に観察する。娘本人だけの点数は三〇点しかないのに、家柄や学歴など無用な粉飾物に甘い点数をつけて合計一〇〇点では、相手は何年かかっても見つからない。三〇点の婿さんは五〇点で十分知れば幸いである。

母親を見れば娘がわかるという。それは真理である。逆に、娘を見れば背後の家庭がわかる、親の人柄が知られるといえば、これもまた真相をうがつ。

適齢期に達する前に、身体的性格的欠陥もある程度なおる。近代医学も教育心理学も、立派にそれを証明している。例えば、夜尿症とか、忍耐の反対の惰れやすく飽きやすい三日坊主とか。それは強い愛情がなおす。多少の無理は、愛の鞭でやむを得ない。「自由にのびのびと育てる」との言葉は、必ずしも周到な愛情とは言えないことが多い。

「母よ、あなたは強かった」でありたい。ただし脳味噌の働きである。弱い母でも良い苗は育てられる。

会談　其の五

神のかなこ湊

(45)

楠早鳥作
福田長庵画

「左様申されますとお答えせぬわけにはいきませんな、一口に申せば山口の館主殿は老狡さで得をし、義弘殿は正直さで損をするお方で、争乱の間は名将で通りましょうが、時勢が落付けばいずれ幕府との間に確執を生じましょう。ゆめ、るい様との御縁組はお考えになさせぬようお願い致します。あの件は明継しかと心得ておりますし」

「若し将軍なら、長門を幕府の直轄領にし西国経営に当る」

と、ひくくつぶやき目を閉じた。

この考えを後世同じ海峡を渡りつつ胸に抱いた人物がいることを明継は知る由もなかった。幕末の薩摩の英主島津斉彬は下関の政治的価値を

「長崎を措いて下関を開くときは、中国の半は、四国の半は、北国は一円、九州は勿論みな此地に開市するを宜しとするの見込なり。……公儀（幕府）が下関を長州の領分に与えたるは拙策なり。公儀は今の世振を考ふるに、長崎其外九州に少しづつの公領あらんよりは、下関・小倉の二ケ所は公領とし、取締をなさば順峡を占める訳にて、九州の諸大名は進退動くこと難き場所なり」

と、語っている。

海峡の半ばまきた時、船はぐうんと速力を落した。舟子等は再び帆を張り前方より風をうけさせながら巧みに舵をとり岸に触先を向けた。

風が冷たく鬢をなぶって行くまでになった。しかし幕府はこれを急ぎ嫌い義弘を除こうとした。ここにおいて義弘は鎌倉の足利氏「いささか鱗悩の気ありとの噂もあります」

「貴公の考えは」

重ねて氏俊は問った。

名両氏の挙兵も失敗に終ったが、義弘はそれに屈せず応永六年の冬泉州堺に兵をあげ、十二月二十一日、四十四才をもって戦死したと史書は伝えている。

申刻、帆を降しあげ潮に乗って海峡に船をいれた。次第に近まる赤間関の風景をまた相対する門司関の山々を明継は眺め、己が若し将軍ならと心中におきた想念を愉しんでいた。

「左様申されますとお答えせぬわけにはいきませんな、一口に申せば山口の館主殿は老狡さで得をし、泉州堺に兵をあげ、十二月二十一日、四十四才をもって戦死したと史書は伝えている。

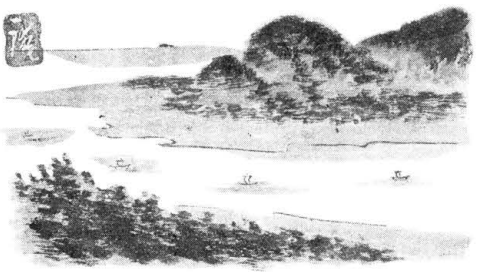
申刻、帆を降しあげ潮に乗って海峡に船をいれた。次第に近まる赤間関の風景をまた相対する門司関の山々を明継は眺め、己が若し将軍ならと心中におきた想念を愉しんでいた。

「若し将軍なら、長門を幕府の直轄領にし西国経営に当る」

と、ひくくつぶやき目を閉じた。

この考えを後世同じ海峡を渡りつつ胸に抱いた人物がいることを明継は知る由もなかった。幕末の薩摩の英主島津斉彬は下関の政治的価値を

「長崎を措いて下関を開くときは、中国の半は、四国の半は、北国は一円、九州は勿論みな此地に開市するを宜しとするの見込なり。……公儀（幕府）が下関を長州の領分に与えたるは拙策なり。



☆　☆　☆

遷宮記念大祭行事

精神復興に着実な歩み

―社会的貢献を願う―

遷宮記念大祭行事は年々充実発展し、多くの称讃を浴びている。この各行事が同大祭の目的である精神文化昂揚と我が国の伝統精神の復活のために着実な歩みをつづけ、成果を上げていることはまことに喜ばしいことである。

中でも、各行事の協賛支援者の増大が目立つことと、各行事の社会的貢献度が高いことは意義あることで各方面から高く評価されている。この為、大社としてもこの点を重視し、各行事をより一層発展させ、それぞれの行事が社会的に寄与してゆく事を念願している。

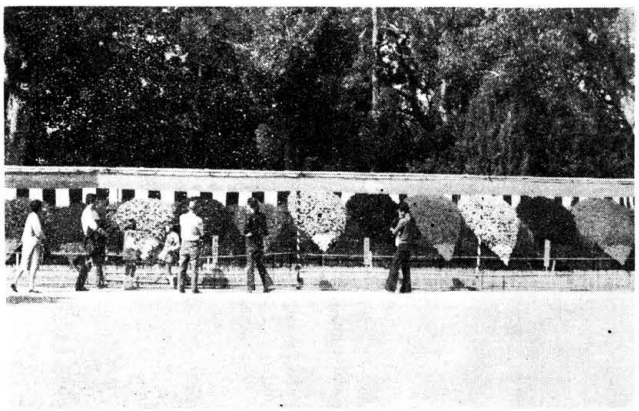
皆んなで盛り上げた 大菊花展に称讃

一日から二十日まで、菊の展示会が開催中の境内は拝観者で大盛況。

この四日本菊花大会は今年で第四回であるが、規模、内容共に益々充実し、九州最大の大会として多くの人を楽しませてきたが、今回も前回に増す盛会となり、人々から絶大な讃辞を浴びた。

出品鉢総数は約一、四〇〇であったが、何れも各地の理事の予選を通過した逸品ばかり。これらが延二百メートル以上のハウスにずらっと並んだ様は正に圧巻。あった。

この菊花展が年々充実してゆく陰には、当菊花会の"国士に花を"の趣旨に賛同くださる方々の心からのご協賛や献身的奉仕作業があったこの方々に紙面をかりて深甚な謝意を表すると同時に、今後もより多くの方々のご支援を得て、この活動を皆んなで支え、皆んなで心のゆとりを取りもどしたいものと願っている。



本年も中村氏が本因坊に

十日に行われた第二回宗像大社本因坊戦で、昨年に続き中村和朗氏が勝利を納め昭和四十九年度の宗像大社本因坊となった。

この日、大会に先立ち参加者約百名はまず神前に正式参拝。正々堂々の試合を神前に誓って熱戦に臨んだ。

対戦はいづれも熱戦。日頃の精進の成果があらこちで発揮せられた一日であったが、昨年度本因坊の中村氏は決勝で順調に勝ち進み、ついに二連覇を成しとげた。

人々を感動させた献吟

三日午前十一時、本殿で清香吟社会会長中桜月氏の献吟がなされた。折から本殿脇では剣道大会が挙行されていたが、この間中断して献吟を拝聴。この作詩は益中鵬山氏による。

奠宗像大社敬仰賦

開闢悠々青史遡
三宮奉祀幾千年

（写真は吟詠中の益中会長）

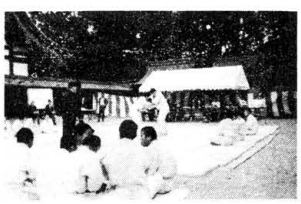
柔・剣道にやんやの喝采

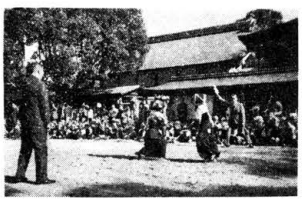
剣道は三日に、柔道は九日に各々挙行された。剣道は既報の通りであったが、柔道大会は当郡柔道協会、各学校関係者などの熱意で今年復活したばかり。

本殿脇に仮設道場を設けて、選手一五〇名が参加して行われた。練習で一汗流したあと、午後一時半、全員で袖を通し参拝。

試合が始まると元気の良い気合があたりを引きしめ、次々に熱戦が繰り広げられた。日頃練磨の技を思いきりぶつけ合う若者等に参観者からやんやの喝采が贈られた。

優勝は一、二年とも玄中。





第三回 献詠短歌大会

第三回を迎えた宗像大社献詠短歌大会はこの十一月十一日午前十時からの行われた。

当日は好天に恵まれ、約二百名の参加者が続々と来場。定刻、まず献詠神事が行われ大会に移った。神事は福間町在住の山村和愛氏（海津宮）により短歌一首（献歌）が朗詠され神前に捧げられた。

この後一同、大会に臨み熱のこもった意見交換や、選者からの評を頂き有意義な一日を過し、午後四時互いに再会を約しながら閉会した。

優秀作並成績は以下のとおり

選者賞

大社賞　若松区　福田雅堂

月の夜を灯り消しゐる貨物船わが船の灯に照らされつつ過ぐ　小倉区　古賀前子

秋すでに定まる陵さし畳屋の仕事場にしるき菌章の匂ひ　福岡市　山本泰子

毎日新聞社賞

わが生れし昭和三年の不況記す父の日記は余白を持たず　八幡区　星雪乃

次点

背を丸め出でゆく夫となりにけりさなきだにさはわびしきものを　福岡市　浅田実

互選

第一位（毎日賞）

はや妻のい寝たる頃か星空に安全帽の紐締め直す　八幡区　豊田光子

第二位（同）

嘗の中に確かめ合いて架橋組む夫の声はひときわ鋭し　宗像郡　比後多美子

第三位（同）

子の温みしらさる吾の腕ふかく小犬は安けき顔して眠る　八幡区　香田小茅

第四位（同）

汚れつつ幽重ねゆくわが生かあわれ白くたてて裸身を洗う　宗像郡　今村重刀

第五位（同）

ひたすらに衣縫ふ妻の糸はどき音のみ聞こゆ雪の夜更を

入選（作品並敬称略）

門司区　土屋伊豆子、若松区　友田中間子、若松区　中野さとし
柳川市　古賀勝喜　宗像郡　松尾豊、同　山田高野、同　加藤帛士子、若松区　杉本静乃、小倉区　藤田ゆう、小倉区　寺島房子、宗像郡　竹原園　以上

盆栽交換会（即売）に人気

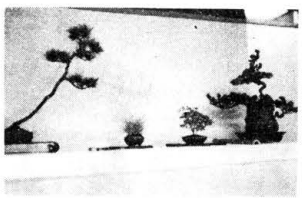
奉納盆栽展は十日から十五日まで、遷宮記念大祭を中心にして開催された。

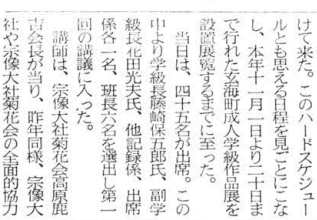
今年度は昨年度に比べ、席数が急増したため会場である祈願所一間だけでは、とうてい収容しきれない程の盆栽などが、参観者の目をひいた。

作品は大作が多かったが、ミニ盆栽などが人気を博していたようである。更に人気が良かったのは今年からの盆栽展に付随して始められた盆栽、植木等の交換会（即売会）。このコーナーは玄海町農協（深田盆栽組合長）の主催形式で行われたため、玄海みかんや鉢の値格な廉売も加わり人気を独占。

地域社会への貢献に一役買ったわけで、生産者は意欲を喚起させられた様であった。

（写真は左が柔道大会。次下が剣道大会の模様。次下が盆栽展作品の一コマ。次が盆栽植木交換会場模様。一タアドバイスをしながら即売に人気。）



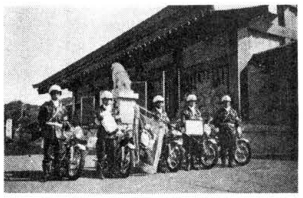


県警白バイ隊全国優勝 当大社にお礼詣り

十一月十二日に鈴鹿サーキットで「第六回全国白バイ安全運転競技会」が開催され、これに出場の福岡県警白バイ隊が団体優勝。同チーム五名と関係者三名が去る二十五日来社し来社。

「大会出場に先立ち必勝祈願をしたお陰です」と、この日も早速神前に優勝旗を捧げて報賽の敬虔な祈りが捧げられた。

同大会には各県警から千三チームが出場、三日間に亘り、速度感覚など安全運転に必要なる五種目の技量が競われ、総合点で二位に二五点もの大差をつけ優勝したとのこと。（写真は喜びの同チーム）



玄海町成人学級開講式

玄海町内の「老人パワー」を中心とした玄海町成人学級の開講式が去る十二月三日玄海町中駒雄教育長参列のもとに当社斎館に於いて開催された。

この成人学級は昨年度より、菊つくりの初歩から極致まで、理論と実習を学ぶ共に自然を愛する心と社会連帯意識をつちかい美しい町づくりに寄与することを目的として毎月一回三時間の講習を続けて来た。このハードスケジュールとも思える日程を見ることになし、本年十一月一日より二十日まで行われた玄海町成人学級作品展を設置展覧の運びに至った。

当日は、四十五名が出席。この中より学級長藤崎保五郎氏、副学級長佐田光氏、他記録係、出席係各二名、班長六名を選出し第一回の講議に入った。

講師は、宗像大社菊花会高原鹿吉会長が当り、昨年同様、宗像大社や宗像大社菊花会の全面的協力のもとに地方菊作りの発展的活動が推進されることになった。

〔お知らせ〕

昭和五十年度 互選会兼題

毎月二十二日午後一時から行われている歌会の例会とも云える互選会の来年度の兼題が決定しましたのでお知らせ致します。

尚、新たに参加希望の方は宗像大社に問い合せて下さい。会費不要、資格学不問。

兼題

一月　新年
二月　炬燵
三月　花冷え
四月　春の海
五月　砂ぼこり
六月　虹
七月　夕映
八月　汗
九月　肌寒
十月　コスモス
十月　大社の秋
十二月　冬木立

宗像史蹟 ㈣

色定法師の一切経と興聖寺

文治四年（一一八八）宗像氏国は父氏実の譲をうけて大宮司職について。先年父と共に源義経に従い平家追討に軍功をはげみ、頼朝から格別の感状をうけ面目を上げた。元来氏国は博学多才で、神仏を殊に尊崇し、武芸弓馬の道に巧（たくみ）で、所領も軍功によるものや、武力によって獲得したものなど、宗像一円以外に各地に散在して新たに白山に城を築いて居館とした。この時から宗像家は神職家から二変して所領＝社領を保護する必要から通常に兵馬を準備して、武家のようになった。この氏国の時代に、宗像の社僧兼祐の子で、色定と号した名法師があって一筆書写の一切経をあらわした。色定（一一五九―一二四三）は良祐、栄祐、識定ともいわれ、良祐は鎌倉建仁寺の開山栄西禅師の俗弟で、伝えによると学問修業のために宋に渡り、文治五年（一一八九）に帰朝して宗像の江口に着いた。氏国は仏法に熱心であったから色定を召しよせて、宋国の風俗、仏法の繁盛などなどを聞いて、「仏の功徳は何が第一であるか」と問ったので、色定は「法華経四功徳の文を按ずるに書写の功徳が第一である」と答えたので、氏国は二層帰依の志を深くして、資財を出して香正寺（興聖寺）という一宇の精舎を建て、写経をはじめさせた。時に色定は二十九才で、七十才まで約四十二年間毎日風雨もいとわず、田島の社と孔大寺権現には必ず欠かさず参詣したが、その道すがらも机を背にかけて書写にはげみ、歩行の間も怠らず、あらゆる困難にたえ五千余巻の一切経を残すとうなる書写した。元来色定の写経はすでに八〇年前の文治三年（一一八七）四月からはじまり、帰国後氏国の援助で益々意を強くしたのである。書写し終った年時は安貞二年（一二二八）で、五千四十八巻は一々の巻末の奥書きで明確にされている。例えば建暦三年（一二一三）書写比丘栄祐法師書と署名され、又建久六年（一一九五）一切経、筆行人比丘祐と認め、又文治三年（一一八九）僧良祐と書かれている。その外は色定と認め、署名のないものもある。しかし現在は四千三百三十一巻と断片が僅かばかりで、これも七百三十年余の年月の間に水害などで損失、散逸したもので、それでも七百余年の長い年月にこれほど残存することは驚くべきことである。この写経もはじめ田島の社のそばに文庫を建てそれに納め、色定も自ら自己の像を刻んで写経の前において、守護神になることを誓ったという。よって全写経がその後の兵乱では散失をまぬかれることができたが、それでも前述の天災で巨百余巻喪失したことはまことに残念なことである。明治初期神仏分離の折、色定の像と共に興聖寺に移され、昭和三十三年二月に国の重要文化財に指定されてから現宗像大社裏の収蔵庫に保管されている。

「色定法師の木像」義眼の木像で衣帽がきせてあって、像の背後に左の記録がある。

大日本国鎮西筑前州宗像第一宮
座主
色定大法師一切経一筆書写行人
仁治二年（一、二四二）辛丑
十二月九日刻之新造像栄範
次年十一月初六日申巳刻入
滅畢

樟板の堅板の堅牢な箱に入れ、約五十巻入の箱九十箱に納入されていた。（一箱に少いのは二十五巻、多いのは五十七巻納入）

写経巻
一枚の長さ　一尺六、七寸
幅　八寸二分
一巻の紙数　二十枚以内のもの及四十枚以上のものもあって不同
書写の当時現存　五千四十八巻
四千三百三十一巻と断片

なお興聖寺は色定が住んだ寺ではなく、墓は寺の境内にある。又色定が入滅した時は安覚と称し、晩年後栄祐、或は色定と改名したというが、安覚と色定は別人であるともいわれて、色定は先輩で安覚は後輩ともいわれる。諸説あって明確を欠く。

久留米工業学園
短期大学助教授
田中政喜

宗像大社歌会
俳句作品集（一四三）

早いもの師走の月の風が吹き　土穴　八尋　恒夫

鱚釣りの竿ちなりに浮走しる　宗像町　安部　光洋

冬ぬくし足はみ出してさすりけり　福岡市　入江　柳江

何事もすみなる除夜の炬燵かな　田熊　力丸　一郎

村道も舗装されて珠沙華　田島　吉武　武雄

小山田の案山子に昼の案顔　宗像　岡田　無名

重ね箱して老天鵞絨柿もぎる　宗像　岡田　無名

〃特別公開〃　一月一日～二十日
海の正倉院　沖ノ島　秘宝展案内

正月一日より二十日までの二十日間、当宗像大社宝物館において新発見の出土品も含めた、沖津宮祭祀遺跡より出土の御神宝を特別公開する。

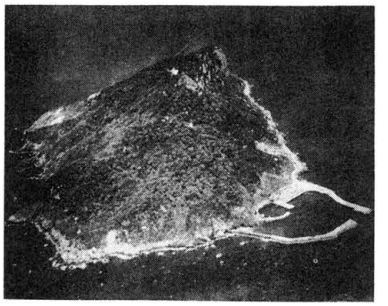
この特別展は、昭和二十九年より昭和四十六年までの第一次から第三次沖津宮祭祀遺跡学術調査により出土した、国宝、重要文化財の御神宝の数々である。御神宝は遠くペルシャのルリ碗や、中国、朝鮮よりの渡来品を多くみる。

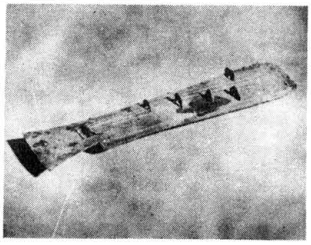
主なる展示品は、金銅製龍頭、金銅製五弦琴、金銅製人形、金銅製紡織具、金指環、装身具、鏡鑑等である。これらの御神宝の展示により古代宗像の祭祀の姿を再現し、大和朝廷と大陸との往古の交渉を究明する。

沖ノ島祭祀遺跡出土の御神宝の公開は、第一次調査終了以来、当宗像大社をはじめ、東京、大阪各地で数度に渡り開催してきた。今回は、数度の学術調査により古代祭祀形態である神嶽、磐境の祭祀の全貌が解明されたので総まとめの意味での特別展を企画した。

沖ノ島は玄海灘の真只中にあり、宗像大社辺津宮より海上60kmに位置し、島は対馬海流に流れ、潮風に晒された荒々しい様相を呈している。

この島に古代人は、神の在す島として大陸へ渡る海上安全を祈願する聖域としてきた。今世界でも類をみない古代一大祭祀遺跡としての姿を現わした。祭場は二十三ヶ所におよび、岩上、岩陰、露天祭祀と形態を異にし、六世紀間の長年月にわたり大和朝廷による国家的尊崇を受けている。





琴のおのとび

金銅製五弦琴

鳥尾琴（とりのおこと）と称され、古代祭儀においてのみ使用されている。琴首を鳥の尾の形につくりつけていることからこの名称がおこった。

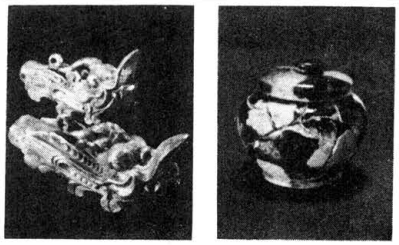
古文献や古墳時代の埴輪の実例からもみるように、わが国最古の様式で、別名「大和琴」とも「かみのこと」とも称されている。（他に発見例なし）

奈良三彩小壺

奈良三彩小壺

奈良三彩とは、中国の唐三彩を模倣して奈良時代にわが国でつくられたものである。

白色の粘土に、黄・緑・白の三色あざやかに配した小形の壺である。沖ノ島では蓋を含めて十五個出土している。全国で三〇ケ所程発見例があるが、祭祀遺跡及び寺院跡がほとんどである。



金銅製龍頭

金銅製龍頭

一対の竜頭は、内部が空洞の筒形となり、口の中央に小孔があり、懸垂用の勾金をさし込んでいる。中国では古代から旗幟類の竿頭を飾るものとして用いられていた。我が国では他に発見例なし。

同様の形式のものが、中国天竜山石窟群の東魏時代（六世紀中葉）仏龕の竜頭に類似しており、大陸より旗幟と共に一対渡来したものであろう。

二宮佐天茲主人
四島一二三伝
――原田種夫著――

傑作なのは、氏の毎月の支店巡店の時であった。今まで巡店は車であったが、決心した上は車が使えない、そこで、バスに乗って出発、そのバスの後を、大きな氏の乗用車がつけ、福岡市を出た所で、その車に乗り換えるという珍風景が展開した。これは帰路も同じである。

こうした事を馬鹿らしいと見る人もあろう、氏も自身の矛盾に内心は微苦笑していたであろうが、一度決めたことは徹底しないと納まらない、こういう点が明治人の骨っぽさというべきではなかろうか。この一年の我儘が終って明る く正月の出勤に、一年ぶりで銀行の車に乗った時には、氏は内心ほっとしたにちがいない。

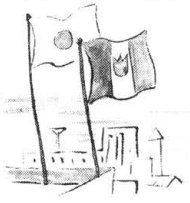
車といえば、氏は時々乗車を拒否する、これは、氏が身をもって示す一種のレジスタンスである。たとえば、銀行の在り方がおかしいとか、業績が思わしくないとか役職員のふんばりが足りないといった場合に起る現象なのだ。

一たび現象が起ると、氏に車に乗ってもらうために、皆がこぞんばりをしなければいけないということになるのである。

三十九年の十一月三日、社長は勲五等に叙せられ瑞宝章を授けられた。この時も社長は伝達式に行かず、代人として常務取締役の司氏が行った。この叙勲の時、八千円のカンガールの靴をくれた人があったが、氏はそれをはいたことがなく、又、三本一万円のネクタイを贈った人もあったが、それをしめたこともない。氏の靴は、いつも、日田の靴屋で買う五五〇円の靴であり、ネクタイは百円より高いのをしめたことがない。三本百円のが六十本、一本五十円のが二十本、一本八十円のが十本あり、それを、毎日取り替えてしめる。洋服にしても、恐意のモリメンにたのみ、一万二千円で作ったのを身につけている。そういう質素ということも氏の身上であろう。

氏は福岡相互銀行の社長であるが、社長の交際費が殆んどゼロであるということも、これまた珍らしいことであろう。氏は無言のうちに範をたれて、銀行マンとしての節度を示しているかのようである。

さきに書いた、氏の「欲しいものは買うな。必要なものは買え」をモットーにしたことで面白い話があるのでつけ加えておこう。印刷所を経営している氏の朔の四島剛氏が、座右の銘にと、氏にたのんでこの言葉を書いてもらい、それを部屋にかけていたところが、ある日、その上にマジックで落書きがしてある。見ると、元気さかりの中学坊やのいたずらで「ソリャムリヨ」とあったので、みんな大笑いをしたそうである。



四十年十一月一日、新らしく行是と行訓が制定された。

行　是

福岡相互銀行は発展する
力を合わせ
積極進取
よい銀行をつくり
顧客とともに
栄えよう

社長　四島一二三

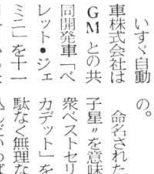
行　訓

あなたは常にホームさんこうの代表者である
愛されるホームさんこうの行員となれ
一、顧客に満足を与えよ
銀行の信用はあなたがつくる。顧客の身になって、仕事は早く、正しく、親切にせよ。信頼されるよき相談相手となれ。
二、銀行を愛し、その発展に全力をつくせ
断じて傍観者であってはならぬ。言動に責任を持ち、常に建設的な意見をのべよ。積極進取、勇気ある実行者であれ。
三、今日の職責を完全に果せ
仕事に誇りを持ち、業務に習熟せよ。
自負できる確実な仕事をなせ。
四、常に改善をはかれ
現状に満足するな、たえず計画性を持ち、創意を銀行の発展に活かせ。
五、全員が家族である
苦楽を共にする心を持て、お互いの立場を理解し、力を合わせて銀行と共に栄えよう。
六、真剣に努力し、自己をみがけ
不断に勉強し、視野を拡げよ。仕事を通じて、成長をはかり、銀行になくてはならぬ人となれ。
七、心豊かな人間であれ
明るいことは、清潔な態度を持ち、明朗な職場をつくれ。節度を保ち、約束と時間は必らず守れ。
八、体を大切にせよ
仕事と休息のけじめをつけ、健康を守れ。病気は新芽のうちに徹底してつみとれ。

この八カ条から成る行訓を読んで思ったのは、これは、すべて四島氏の信条、あるいは格言の集大成ということである。すべては、きびしい倫理感で貫いて来た氏の、長い体験から生まれた言葉なのだ。命令形で書いてはあるけれども、決してこれを強いるものではなく、かくあってほしいという氏の理想と考えたい。（完）

（これをもって四島一二三伝を終了致します。）

話題の新車をみる（二）
ベレット・ジェミニの巻

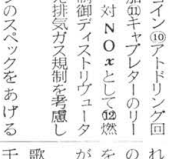


いすゞ自動車株式会社はGMとの共同開発車「ベレット・ジェミニ」を十一月一日から全国一斉に発売した。

いすゞとGMとが足掛け三年の歳月をかけて完成した所謂国際商品であり、いすゞの型式ナンバーはFP五〇型と呼ばれ従前の「ベレット」の後継車といえるもの。

命名された「ジェミニとは〝双子星〟を意味するが、ドイツの大衆ベストセリングカー「オペル・カデット」を原型に、いすゞが無駄なく無理なく内容の充実を盛り込んだいわば双子の兄弟である。

いすゞが久びさに世に送り出した全く新しいボディと全く新しいエンジン搭載のこの車は精悍なマスク・コンパクトボディで、インテリアはいすゞ独自といえるシンプルなもの、サイドヴューもバランスのいいプロポーションをみせている。



搭載されているG一六一Z型エンジンは全てのバリエーションに共用されI－CAS（いすゞクリーン・エア・システム）の母体となるもので、これまでのG一六一S型の経験をフルに生かした自信作といえるもの。

現段階に於けるその主な装置は対HCとして①ブローバイガス還元装置②燃料蒸発防止装置③コーステイングリッチャー④ライニングオン防止装置、対COとHCとして⑤ホットアイドル・コンペンセーター⑥アイドルリミッター⑦オートチョーク⑧吸気の温加熱装置⑨外部抵抗付きイグニッションコイン⑩アドトリングル回転数の増加⑪キャブレターのリーンセット、対NOxとして⑫燃焼温度界制御ディストリビュータ等を備え排気ガス規制を考慮している。

エンジンのスペックをあげると、水冷直列四気筒SOHC、V型バルブ配置の半球式燃焼室をもち総排気量一五八四CC、圧縮比八・七。

〔解説〕
古式祭

古式祭がいつの頃から始められたかさだかでないが、ともかく相当古くから行なわれていたことは推定に難くない。古くは十一月上兎の日の祭りで、一条兼良の公事根源に記載される頃には、十一月十五日に改められ、宗像祭りと称されていたと云われる。江戸時代には、惣社祭と呼ばれ、明治十四年に陽暦の十二月十五日に改められ、名称も古式祭となり今日に至っている。

当社に残る記録に、宝暦八年十一月十五日御宮霜月祭帳がある。これに依れば、「田島村中霜月十五日御祭組合之事」として、一番山下組は兵部以下三十一名、二番上橋組は主税以下四十四名、三番上殿組は主税以下三十九名、四番片脇組は主税以下二十九名が名を連ねている。

古式祭の特色は、古い形式を踏襲した神饌にある。御飯を円錐形に盛りあげ、お菓子と呼ばれるものが供えられる。これは、数本の竹の小串に菱形の小餅をさしたものや、蜜柑の一種で九年母といわれるものを切ったもの、江口の浜の海藻と大豆をあえたゲバサモ等を云い、現在でもその形式は変りがない。

また宮司祝詞奏上の後は式中踏歌の歌詞が奏上される。

千早振る第一の宮の木綿だすき
掛けての後は楽しかりけり
千早振る第二の宮の木綿だすき
掛けての後は楽しかりけり
千早振る第三の宮の木綿だすき
掛けての後は楽しかりけり

祭典終了後、古式祭お座が催される。お座には先ず新むしろが敷かれ、膳が据えられる。膳には御腦、汁、ナマス、ニンメがあり菜肴が付いている。撤饌の御酒、御供、菱餅が添えられる。

円錐形に盛られた御飯のために大根おろしがたっぷりと添えられているのは生活の智恵と言えよう。

このお座は式次第が定められており、お座の由来を当番が読み上げ、くじが配られ、次にお酒、次に饗膳となっている。

現在では、田島部落を上殿、福田、吹浦、片脇、本村、賀谷、山下、飛松の八組が順番に当番を奉仕することになっている。

明治二十一年の御宮座次第並抽籤心得書には一、座席の混乱せざる様、取締人を設ける事、但し座取締人は羽織或は袴を着用する事、とあるのが面白い。お座を楽しみとし、中には飲む程に酔う程にお座を乱す者があったのであろう。

昭和初年には座の外に、当日余興として、筑前ビワ大家高野旭風女史始め高弟一行、黒田藩武術師範高山先生の武道、博多水茶屋芸団の博多節、田植祭、豊年祭が行われたと記されている。

放生会が稔りの秋を感謝する祭りとするならば、古式祭は収穫の済んだ新穀を神に捧げ、神と共にそれを頂くという新賞祭ともいえるところに重要な点があると考えられる。